

教会の動き

朝づとめ…毎朝・6時30分
 タづとめ…毎夕・7時30分
 元旦祭…午前7時・午後1時30分
 春季大祭…1月21日午後1時30分
 秋季大祭…10月21日午後1時30分
 月次祭…毎月21日 午後1時30分
 春・秋季霊祭…3月22日、9月22日 午後1時30分

夏のごどもおぢばがえり



楽しい夏の「ごどもおぢばがえり」が、奈良県天理市の「おぢば」で今年も催されます。
 アスレチック、プール、華やかなパレードなど楽しい催しものでいっぱいです。そしてまた、世話にあたる元気で楽しいお兄さん、お姉さんたちとふれあい、おもいっきり遊ぶ事によって、子どもたちの心に楽しい思い出として残っていくことになっています。



狭千廣分教会では、「狭山隊」として7月30日、31日の二泊三日の日程で参加予定しております。たくさんの子どもたちに参加して頂きたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。
 詳しくは右記をご覧ください。
 記
 日時…7月30日(土)、31日(日) (一泊二日)
 集場所…7月30日 午前8時10分
 (場所…狭千廣分教会)
 解散時間…7月31日 午後5時頃
 【今熊1-1-33】
 内容…おぢば参拝、行事参加(プール、劇等)
 持ち物…帽子、水着、着替え、洗面具(風呂道具)
 参加費…小・中学生 3,300円
 大人 3,500円 未就学児童 3,000円
 宿場所…中河野所(0743-63-0153)
 なお、持ち物は、必ず各別書にて下さい。
 必要以外のお金は持参して来ないようご注意ください。
 い、おじかいは000円以内です。
 7月20日までに、狭千廣分教会(山口)へ申し込んで下さい。

編集後記

「さちひろ」第4号をお届けします。巻頭の「破れ窓理論って」は、狭山青年会の機関紙「飛躍」第23号の「お道のQ&A ひのきしんって何？」に掲載したものをここにも載せました。若干加筆訂正しております。

隣接する山の宅地造成工事は、さらにすすんでいます。詳細は、わたしのホームページの「#やまさんの掲示板」(http://sachihoro.com/~board/board.cgi)に写真入りで掲載しておりますので、ご覧下さい。だんだんわが家に迫っています。第2面の最下段に高橋美津志著「ちよつとひとこと」(善本社)から、「幸せを届ける言葉」を載せました。連載します。

さちひろ 第4号
 編集兼発行人・山口 渡
 平成17年6月21日
 大阪狭山市今熊1丁目1133番地
 ・072-3665-2571

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・破れ窓理論って
- 2面・日本の精神性と宗教(2)
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 072-365-2571
 E-mail:wat@sachihoro.com url:http://sachihoro.com 編集兼発行人・山口 渡



むかし、桂文枝さんだったか？、いろいろいな宗教を話題にした落語を聞いたことがありますが。玄関を掃除している光景を天理教信者の典型的人物として登場させていました。『ひのきしん』には残りました。天理教を代弁する行為として「掃除」「ひのきしん」というイメージが確実に形成されているのを実感したものでした。

もともと「ひのきしん」の意味は、「日の奇進」であつて、日々の奇進、一日の日の奇進することです。「これから世界の普請にかかると教祖が仰せになった(陽気ぐら

『天理教教典』では狭く解釈して、かしの「かりもの」の守護への感謝を「日々常々、何事につけ、親神の恵を切身に感じる時、感謝の喜びは、自らその態度や行為にあらわれる。これを、ひのきしんと教えられる」と説明されています。

ところで、「破れ窓理論」って、どこ存じですが、「破れた窓が大きい荒廃につながり、無傷の建物なら石を投げない人間でも、すでに窓が一つ壊れている建物なら、もう一つの窓を壊すことに抵抗を感じないだろう。さらに、次々と窓を割って大胆になつた人間は、もつと悪質な犯罪を行うかもしれない」というもので、前ニューヨーク市長のジョージ・P・トニーの町を、アメリカ



力強いちはん 治安の良い町に変えました。それは、落書きを消すことと、交通規則を徹底することから始めたのです。「小さなことをおろそかにしない」という彼の「破れ窓理論」を実践したので、お道を通るわたしたちにも、この理論は、刺激的です。この教えを信じて歩む人の周りには、いつてもきれいに掃除が行き届いていて、ゴミは捨てるれないなあ、と感じてもらえたら…。そしてその範囲を地域に、さらにもつと広げていけば…。そんな小さなことが陽気ぐらしの普請への日々の奇進・ひのきしんになると思

破れ窓理論って





天理の紹介 「日本の精神性と宗教」(2)

天理大学創立80周年と天理教二代真柱生誕100周年を記念して開催されているシンポジウムについて、前回5月14日、人間学部主催の基調講演(河合隼雄・文化庁長官)の要旨の前半をお伝えしたが、今回はその後半部分を掲載する。

これを上手に説明されるのは、井筒俊彦先生である。「意識と本質」という著書のなかで、西洋の論理は何ものについても分析的で、ものごとを分けることを重視するのに対して、東洋の考え方は、「つながりの意識」を重視するという。意識を鍛錬して、区別がなくなる、まったくつながってしまった存在としかいいようのないものとなる。存在が花になる、存在がコップになる。動詞が主語になる、何事に対してとも畏敬の念を持って接するのである。

住民にもあった。かつてプリンストン大学にいた頃、アメリカ先住民ナバホにもあることを知った。(「ナバホへの旅」たましいの風景 アメリカ先住民 癒しの文化の深層 朝日新聞社刊参照)。また、キリスト教がヨーロッパに入ってくる以前の社会にはそうした宗教的感性があったようだ。アイルランドのケルトに残っているという。

このコーナーでは、前回予告した高橋美津志著『ちよっとひとこと』から「幸せを届ける言葉」をランダムに取りあげ掲載します。

幸せを届ける言葉

「宗教教育」

猫の子は猫から生まれ、
犬の親から犬の子が生まれる。
鬼のような異常性の子を
俗に鬼子という。
鬼子は、
鬼のような親から生まれ、
親不孝な親から、
親不孝な子が生まれる。
よく考えると、
現代社会は、
宗教教育なき教育で、
賢い悪魔をつくっている。
先ず親が、
宗教教育を身につけねば、
子の幸福はありえない。

「稿本天理教教祖伝逸話篇」 7

中山家が、谷底を通っておられた頃のこと。ある年の暮に、一人の信者が立派な重箱に綺麗な小餅を入れて、「これを教祖にお上げて下さい。」と言って持ってきたので、こかんは、早速それを教祖のお目にかけた。

すると、教祖は、いつになく、「ああ、そうかえ。」と、仰せられただけで、一向御満足の様子はなかった。それから二、三日して、又、一人の信者がやって来た。そして、粗末な風呂敷包みを出して、「これを、教祖にお上げて頂きとうございませう。」と言って渡した。中には、竹の皮にほんの少しばかりの餡餅が入っていた。例によって、こかんが教祖のお目にかけると、教祖は、

「直ぐに、親神様にお供えしてあげ、と、非常に御満足の体であらせられた。これは、後になって分かったのであるが、先の人は相当な家の人で、正月の餅を搗いで余ったので、とにかくお屋敷にお上げしようと言って持参したのであった。後の人は、貧しい家の人であったが、やっとのことで正月の餅を搗くことが出来たので、「これも、親神様のお蔭だ。」

真心の御供

何は描いてもお初を。」というので、その描き立てのところを取って、持って来たのであった。

教祖には、二人の人の心が、それぞれちゃんとお分かりになっていたのである。こういう例は沢山あって、その後、多くの信者の人々が時々珍らしいものを、教祖に召し上がった。教祖は、その品物よりも、その人の真心をお喜び下さるのが常であった。そして、中に高慢心で持って来たようなものがあると、側の者にすすめられて、たといそれをお召し上がりになっても、「要らぬのに無理に食べた時のように、一寸も味がない。」と、仰せられた。

一般に、神仏への祈願や加護に対する感謝の気持ちは、供え物によって表されます。供え物は、金銀財宝から、農作物や狩猟採集した山海の珍味などさまざまです。時には、労働の対価として得た金銭が供えられる場合もあります。神仏はその供え物を食したり、金銭を使うことにはないのですが、供えられた方の真心を受けとめられるのです。

聖書のルカ伝にこんな話があります。また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入れるを見て言われた、「よく聞きなさい、あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである。」「その石一つでも崩れずに、他の石の上に残ることもなくなる日がくるであろう。」「あなた方は惑わされないように気をつけなさい。(ルカ書21章1-9節)

「やもめのレプタ」という話です。夫を亡くして、収入のない貧しい服装をしたやもめが、寶銭箱に入れた2レプタ(いちばん小さいお金)が、もつとも大きな捧げものであるとイエスが指摘しました。他の人たちは有り余るものを寶銭箱に入れたが、彼女はつらいほどのお金を入れたからと説明されています。これはこの逸話篇のお話に通じているところがあります。

神様は、人の心を見抜き見透されていて、その真実の心をお受け取りになるのです。「泣く／＼するようでは神が受け取れません。百万の物持って来るよりも、一厘の心受け取る。(おさじつ・明治35年7月20日)と言われています。